

# 東海学園大学派遣 在外研究報告

## —ドイツ・ダルムシュタット工科大学にて—

小田佳子\*

### 1. はじめに

2017年度4月から3月までの1年間、東海学園大学の在外研究制度によりドイツ・ダルムシュタット工科大学（以下、TU Darmstadt : TUDとする）に滞在する機会をいただき、著名な社会学者、カール＝ハインリッヒ・ベッテ教授の全面的なサポートにより、招聘教授としてTUDでの在外研究生活が始まった。

私が滞在したダルムシュタットという街は、ドイツ国内でも有数の学園都市であり、フランクフルトからアウトバーン5号線で南へ30km下ったところに位置する。TUDは旧王宮を含めた中央施設がある街の中心のキャンパスと、建築学部やスポーツ施設を擁する郊外のリヒトヴィーゼ地区にあるキャンパスからなるドイツ中規模国立大学である。

ダルムシュタットの人口は約15万人であり、TUDの他にも専門大学（Hochschule Darmstadt）などがあり、若者や芸術家、研究者が多く住む、静かで住みやすい街である。

本報告では、渡独までの渡航準備やTUDでの研究生活、実践活動（剣道）などについて報告する。



大学横のゲオルグ王子の庭園

### 2. 大学の選定と渡航準備

大学の選定については、専門研究分野の第一人者であるカール＝ハインリッヒ・ベッテ教授（Prof. Dr. Karl-Heinrich Bette）の下で学ぶことが第1理由であり、ベッテ氏の在籍がTUDであった。体育・スポーツ哲学分野の権威とえば、カールス・ルーエ大学の哲学教室のハンス・レンク教授（Prof. Dr. Hans Lenk）になるだろう。レンク氏は1960年ローマ五輪のボート・エイトの金メダリストでもある。大学選定当初、レンク氏に連絡を取ったところ、現在は80歳を超え、カールス・ルーエ大学で継続していたゼミ（研究会）も閉じたところで、現実的に大学に招聘することは難しいとの回答であった。そこで、レンク氏からベッテ氏を紹介いただいた。ベッテ氏は、木村真知子氏によって翻訳された『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点』の著者として日本でも知られてお



リヒトヴィーゼにある大学の運動グラウンド

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部

り、ドーピングのみならず、社会学的視点から近代・現代スポーツに鋭い視点でメスを入れる社会学者である。この機会に、ベッテ氏の下で研究活動ができるのであれば、願ってもないチャンスだと回答すると、レンク氏のご厚意によりベッテ教授からも快諾をいただき、TUDから在外研究の招聘状が送られてきた。派遣予定の2017年度が始まる前の冬休みに、ドイツTUDのベッテ教授を訪ねた。彼はクリスマス休暇であるにもかかわらず、大学の研究室を開けて、同僚であるスポーツ教育学のフランツ・ブックラース教授(Prof. Dr. Franz Bockrath)と一緒に待っていてくれた。

ドイツでの長期滞在ビザ申請については、ドイツ大使館・総領事館HPの「長期滞在ビザ」に関する案内に従って手続きを進めた。ドイツのビザ申請は、日本でも事前申請が可能であるということで、現地での雑務を避けたいと考え、大阪のドイツ総領事館に申請予約を取り、2017年2月14日に出かけた。しかし、大阪の総領事館では「大学の在外研究であれば、大学間で手続きをされたらよいのでは？」とあっさり門前払いされ、日本でのビザ申請は断念することになった。この事態を受入れ先であるTUDに相談すると、TUDにはウェルカム・センター(WC)と呼ばれる海外研究者招聘のための受け入れ機関があり、「心配せずに来独して下さい。長期滞在ビザ申請は現地で」と。4月に現地入りすると、ダルムシュタット市内の外国人局にWCスタッフが付き添ってくれ、住民登録やビザ申請をスムーズに行うことができた。ドイツでは保険加入が長期ビザ申請の必須条件であるため、現地で健康保険をネット検索して加入した。私の年齢(48歳)では月々約80€(11,000円)程度であった。



ベッテ教授(左)とブックラース教授(右)

### 3. 大学生活と研究

在外研究では、次の2つの研究課題「①武道(剣道)の国際化と国際的普及に関する社会学的・哲学的考察」、「②武道(剣道)の科学的コーチングの在り方に関する研究」に取り組んだ。特に、②のコーチングについては、Rainer Martensの“Successful Coaching, 2004”と“Coaching Young Athletes, 1981”を翻訳しつつ、これらを底本としてコーチング科学の知見に従い武道(剣道)における科学的コーチングのあり方について考察をすすめた。

TUDでの先生方との研究指導や打ち合わせは全て英語でなされたが、授業は全てドイツ語で展開されるため、まず半年は自身の研究課題をすすめつつ、大学附属機関の語学研修プログラムでドイツ語を懸命に勉強した。

夏が過ぎ、秋からはベッテ教授の『ドーピングの落とし穴(Die Dopingfalle, 2006)』と「サッカーの社会学」の2つの講義を聴講した。講義では、『ドーピングの社会学(Doping im Hochleistungssport, 1957/1995)』の続編である『ドーピングの落とし穴』を精読し、「ドーピング問題を通して社会的に近代スポーツから現代スポーツに至るまでのスポーツの本質や矛盾に迫ろう」としていた。ベッテ教授の社会学的視点から、勝利至上主義を起点とするドーピング問題を通してスポーツを眺めることで、筆者は「近代スポーツ」と一線を画す「武道」の存在意義を明確に映し出すことができるのではないかと考察した。さらに、ブックラース教授とクレア先生が担当されているスポーツ教育の講義や教員免許状の取得を目指す学生の教職演習にも参加させていただいた。ドイツの学生は、講義前に課題として提示された文献を読んだ上で講義に参加し、教授と相互に議論を展開する学生の姿勢に感動した。まさに、これが受け身でないアクティブ・ラーニングなのだと感じた。ブックラース教授には、ドイツにおける教員養成課程の実態やTUDでのスポーツ(体育)教員免許取得に必要な教職科目についてご教示いただいた。

ドイツの大学教員のサバティカル（研究休暇：大学での授業を免除）期間については、教授は基本的に4年半に1度半年間の、次の4年半には1年間のサバティカル期間が保障されている。じっくりと思考し、研究にのみ集中する時間が保障されているという環境が羨ましく思われた。大学でも、教授は週に4～5コマのみの授業担当で、その分、非常勤職の先生方やPh.D.の学位を持つ若手スタッフが実習のコマを多く担当していた。

現地での学会参加は、7月にエッセンで開催されたECSSヨーロッパ・スポーツ科学会議に出かけた。この学会には、日本から参加した筆者の学位論文指導教官である近藤良享教授（中京大学）に同行した。会場では主に「ドーピング防止策」に関する情報収集と、人脈を頼りにドイツの学生を対象とした調査依頼を行った。9月には、カナダのウィスラーで開催されたIAPS国際スポーツ哲学学会2017に参加し、“Mushin and Kendo -An analysis of Takuan Soho’s Unfettered Mind-”を口頭発表した。さらにカナダからドイツに戻るとすぐに、ミュンヘンで開催されたSHDドイツ・スポーツ科学会議に日本体育学会からの派遣員として招聘参加した。日本からは学会長の深代千之教授（東京大学）が来独され、ご一緒する貴重な機会をえた。SHDの詳細については以下に報告する。

### 3-1. ドイツ・スポーツ科学会議への参加

新緑が眩しかった夏が過ぎ、ドイツ最大のビール祭、オクトーバー・フェストの準備で慌ただしいミュンヘンの街で、2017年9月13～15日に第23回ドイツ・スポーツ科学会議（23. Sportwissenschaftlicher Hochschultag der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft : dvs）が開催された。

ミュンヘン工科大学（Technische Universität München : TUM）がホスト校を務め、“スポーツのイノベーションとテクノロジー（Innovation und Technologie im Sport）”というテーマが設定されていた。

本大会には7名の基調講演者がドイツ内外から招待されていた。大会中の司会進行等はドイツ語で進行されたが、海外からの演者が登壇すると、そのまま英語にスイッチされた。

大会初日の基調講演トップバッターには、ノルウェーのシグムント・ローランド氏が登壇し、スポーツ倫理学の立場から「スポーツにおける倫理とテクノロジー」と題する講演を行った。ローランド氏は、ECSS（ヨーロッパスポーツ科学会議）の会長を歴任し、IAPS（国際スポーツ哲学学会）でも馴染みのある研究者である。講演では、ブレード・ランナーのオスカー・ピストリウス選手をめぐる倫理的課題についても議論され、筆者の研究意欲を駆り立てる内容であった。その他に、非常に興味深かったのは、ミュンヘン工科大学のロボット工学で教鞭をとられているゴードン・チェン氏の「ヒトとロボットにおける感覚運動性の相互作用」だった。京都でロボット工学を学んだというチェン氏のヒュウマロイドを製作する実験工程が紹介され、ロボットの骨格と動きづくりだけでなく、よりヒトに近づけるために、ヒトの皮膚の細胞と同様にロボットの皮膚の細胞を1枚1枚センサーで作成し、その細胞をつなぎ合わせる様子などが紹介され、スポーツと工学の融合が印象的であった。



学会大会前のアテンド学生との記念撮影

一般発表は11会場に分かれ、質疑応答を含めて1発表15～20分間隔で、ドイツ語で展開されていた。発表演題は、バイオメカニクスや運動生理、スポーツ哲学というような専門分野別の分科会ではなく、テーマやキーワードに従って横断的に51の分科会（ワークショップ）に分かれていた。発表演題は315題であり、参加者数は1日に約500人余りで、3日間で約1,500人であった。

2日目には学会の公式ディナーがあり、会場はFCバイエルン・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アリーナ（サッカー・スタジアム）であった。参加者の入場口としてアリーナへの選手入場口を使用し、

バスを降りてそのまま直進すると、サッカー・フィールドへと繋がっていた。地下のロッカールームから繋がる階段を上って、夜のライトアップされたフィールドに立った瞬間には、鳥肌が立つ感じがした。

最終日のパネルディスカッションでは、パラリンピックの金メダリストでブレード・ジャンパーのマルクス・レーム (Markus Rehm) 選手を迎えて、「義足を通した利点の有無?! ((K) ein Vorteil durch Prothese ?!)」と題したパネルディスカッションが企画された。ここにも、IAPSで活躍されているマイク・マクナミー (Mike McNamee) 氏がコメンテーターとしてイギリスから駆けつけ、スポーツ倫理学の視点からフェアネスやエンハンスメントの可能性について示唆していた。パネルディスカッションも一般発表と同様に、スポーツ哲学やバイオメカニクスなど、多面的・学際的な視点から現象を捉え議論しようとする様子がみてとれた。

学会のスポーツプログラムとして、早朝7時から8時に、ヨガやECOを使ったイングリッシュ・ガーデンへのウォーキングなどが企画され、また、ミュンヘン・オリンピック記念公園に隣接するTUMスポーツ科学部が設置されている大学施設見学なども企画されていた。

最後に、大会運営に関わっていた学生ボランティアの様子を紹介しておきたい。学生ボランティアは、学部生68名が選抜され、大会プログラムにも氏名が記載されていた。仕事内容は、発表教室でのAV機器担当、大会受付、食事ケータリング、参加者の送迎、海外ゲストのアテンドなど多岐にわたり、朝7時過ぎのケータリングから夜23時の送迎までフル回転で活動していた。特に、工科大学の学生らしく発表者のマイクや発表機器の設定などは、全教室に1名配置された学生が行っていた。また、私たちのような海外ゲストのアテンドを担当してくれた学生は、実に流暢な英語で学内や市内を案内し、かつ親切で配慮のある対応は見事であった。彼らは、夏季休暇中ではあるが、スポーツマネジメントの授業と連携し、実践力の単位評価につながる場となっていると語ってくれた。



ハンス・レンク教授 (ご自宅にて)

在外研究期間最後の2018年3月には、ハンス・レンク教授を訪問し、カールス・ルーエ大学のスポーツ科学関連施設や研究棟等も視察させていただいた。

#### 4. ドイツでの生活と実践活動 (剣道)

実は、筆者は10年前まで4年間、文部科学省の在外教育施設派遣によりフランクフルト日本人国際学校に勤務していた。フランクフルトは、ダルムシュタットから車でアウトバーンを北へ30分の生活圏内にあり、剣道の稽古にはフランクフルトまで通っていた。本項では、ドイツでの生活と実践活動である剣道について、季節の経過とともに報告したい。

春…ドイツ人は皆、寒く長く暗い冬の終わりとともに春とオイスター (復活祭) の訪れを心待ちにしている。自然や環境を大切にしているドイツには、街の至る所に大きな街路樹や公園が沢山あり緑豊かな雰囲気がある。大学横のヘア・ガルテン (広大な芝生の広場) の新緑が一斉に芽吹き、隣接するゲオルグ王子の庭園の花々が一斉に咲き乱れる。リンゴの花、藤、あやめ、バラなど華やかな景色で、このお庭のベンチで昼食をいただくことが幸せだった。ダルムシュタットには、街のシンボルであるマチルダの丘のさらに奥に「バラの丘」がある。5月から8月まできれいに手入れされたバラ園が見ごろで、夏は夜9時過ぎの日没までゆっくりと楽しめる。5月は、イチゴやシュパーゲル (白アスパラ) の露店が街に出て、甘い香りが漂う季節でもある。剣道には、毎週火曜と木曜の夜 (20～22時) に剣道具を担いで出かけた。5月には第28回ヨーロッパ剣道選手権大会がハンガリーで開催され、ドイツチームとともに大会視察を兼ねて、

応援に出かけた。

夏は短く、ドイツ人は当然のようにウアラウブ（バケーション：長期休暇）で旅行に出かけ、多くの職場が開店休業の状態になる。大学内もガランとして、スタッフが全員揃うことはほぼない。ドイツ人にとって、ウアラウブは当然の権利であり、ベツテ教授からも、日本人は豊かな人生を指向して「ワーク・ライフ・バランス」をもっと考えるべきだと指摘された。しかし、筆者にとってはドイツにいること自体が日常ではなく、また9月の学会準備がはかどらず、TUDにひとり留まってドイツ語研修と学会準備に格闘していた。



真夏の夜の公園

そのため周囲からは「バルコニアン（アパートのベランダで休暇を過ごす人）」と呼ばれていた。夏の夕食は、どの家庭でもバーベQが主流になり、ソーセージやステーキを炭焼きで食べる。夏休み中は、学校のハウスマイスター（管理人）もウアラウブに出かけるため、稽古場である学校も閉鎖され、剣道はオフシーズンに入る。この夏、私はヘッセン州剣道連盟の強化コーチに就任し、秋から月に一度の強化練習に加わるようになった。

秋は、収穫の秋であり、新ワインの秋でもある。各ワインケラー（酒蔵）から新作ワインと取れたての葡萄ジュースが発酵を始めて炭酸が出る「フェダーバイツァー」と呼ばれる新ワインが出回る。これを新玉ねぎのキッシュと一緒にいただく。ドイツには、フランスのアルザスに繋がるワイン街道があり、毎週末、各地のワインケラーを回って新ワインを楽しむことができる。9月初旬に、イギリス女子剣道講習会の招聘講師として1週間カーディフでの剣道合宿に参加した。現地には、日本から東海学生剣道連盟の学生と教員も参加し、日本人学生とイギリス人メンバーが積極的に剣道交流で汗を流し、充実した講習会となった。秋は学会と剣道大会のシーズンでもある。11月にはドイツ剣道選手権大会の団体戦が開催された。夏からの強化練習の成果もあり、所属するヘッセン女子チームが見事に優勝し、2017年“ドイッチェ・マイスター”に輝いた。



ドイツ選手権大会後のヘッセン・チームメンバー

冬は、何と言ってもバイナハツ・マルクト（クリスマス市）が美しい。10月を過ぎると日に日に日照時間が短くなり、長く暗く寒い冬がやってくる。鬱になりそうなピークの11月末から12月のクリスマスにかけての4週間をアドベンツと呼び、各街のあちらこちらでバイナハツ・マルクトが開催される。冬は15時過ぎから日が沈み、すっかり暗闇に包まれるため、マルクトの灯りからはとても温かいぬくもりが感じられる。マルクトの定番の料理としては、あったかいGlühwein（シナモン味のホット赤ワイン）やLebkuchen（シナモンの焼き菓子）、カレーソーセージや

ジャガイモもちのような揚げ物がある。さらに、サッカーやオペラ鑑賞など劇場のハイシーズンでもある。筆者は、ベツテ教授の「サッカーの社会学」を体感すべく、フランクフルトのバルド・スタジアムに足を運んだ。フランクフルト・アイントラハット対シャルケの対戦で、アイントラハットがロスタイムで逆転勝ちしたのは良かったのだが！後部座席で観戦していたオッサンたちが興奮し、彼らが手にしていたビールのシャワーを浴びることになった。

剣道では、2月にスイス剣道連盟の冬合宿に講師として参加し指導することになった。スイスのオリンピックハウスで実施された講習会であった（丁度、平昌冬季五輪が開催されていた）が、その充実した選手育成制度とトレーニング環境も同時に覗くことができた。さらに同2月に、全国教育系学生剣道連盟か

らの国際交流企画として、ドイツでの剣道交流を希望する日本人学生を受け入れることになった。群馬大学、滋賀大学、福岡教育大学から剣道部員が来独し、1週間ダルムシュタットに滞在して、ヘッセン・メンバーと一緒に剣道で交流した。若くみずみずしい感覚で、国際剣道交流を通して、日本武道である剣道を再認識することは、学生にとってこれからの大きな財産になるものと切に願っている。

以下に、9月初旬にイギリスのカーディフで開催された女子剣道講習会の様子を紹介しておきたい。



ダルムシュタットのバイナハツ・マルケト

#### 4-1. イギリス女子剣道講習会での招聘講師

2017年8月30日の正午過ぎ、カーディフに向かうためにフランクフルト空港に到着すると、空港閉鎖が実施されていた。第2ターミナルの空港ロビー（チェックインカウンター）から全ての人々が締め出され、警察官だけが中にいた。間もなく、KLMから手元の携帯にメールが入り、出発便が30分遅れるとのことだったが、理由は知らされないまま1時間半遅れで出発した。カーディフ便はアムステルダムで乗り換えだったが、日本からアムステルダム空港で合流するはずのメンバーはすでに出発し、ようやくカーディフに到着したのは22時すぎだった。イギリスメンバーが空港まで迎えに来てくれ、無事に宿舎にたどり着くことができた。結局、フランクフルト空港で、何が起こったのかは全く説明されず、あれだけの厳戒態勢で空港ロビーを閉鎖したことから考えれば、テロなどの疑いが拭えず、改めて日本から迎えたメンバーの安全を願わずにはいられない状況であった。

##### 1) 剣道講習会

5月にハンガリー・ブダペストで開催されたヨーロッパ選手権で、筆者は、すでにイギリスチームの試合を観ていた。本講習会が企画されてから、何がイギリスチームにとっての課題なのかを見極めようと考えていたが、大会では、当然、競技力向上を前提とした課題設定になった。そこで、見出された課題は「足さばき」と「体さばき」であった。

講習会では、まず「一眼二足三胆四力」を説明し、眼を見て相手の心を読み、間合い（相手との距離）を測ることが大切であること。足さばきが打突の基礎となることを伝えた。さらに、手ではなく足や腰で打つことに意識を集中するように伝えた。金曜日のウェルカム稽古では、課題の確認とともに、地稽古で交流した。土曜日は、午前中に日本人学生とイギリス女子メンバーが交流試合をして、参加者の課題を再度確認した。その際、前日の稽古を見ていて、鏝迫り合いから技を出そうとする意識が低く、鏝迫り合いの組み方も甘いため、日本人学生には鏝迫り合いから厳しく攻め、引き技を出すように指示した。午後の稽古では、石原先生（三好高）に指導を担当していただき、「足さばき」と「体さばき」を意識しながら、間合いに集中して打突の機会を作る方法と、引き技の出し方を練習した。

日曜日の午前中は、筆者が「有効打突の概念と残心」について英語と日本語で講義した。日本剣道の「国際的普及」の展開や、剣道の「有効打突の概念と残心」についてイギリス人がどの程度理解し、日英両国の剣道に対する共通理解が図れるのかを試したいという思いがあった。さすがに、イギリスで展開される剣道に真摯に取り組むメンバーの理解力は素晴らしく、積極的な意見が出され、活発な議論が展開された。彼らからは、「剣道がオリンピック種目になるようなことがあるのか？」というような剣道の「国際化」に関する危惧を表す質問も飛び出した。一方で受け身で講義を受ける日本人学生の受講態度を反省した。午後の稽古では、興儀先生（愛知剣道連盟）に指導担当いただき、初心者レベルの参加者を対象として、ゆっくりから素早く、すり足から踏み込みへと段階別に剣道技の基本稽古を実施した。また現地の要望で、毎回の稽古の中に30分程度の地稽古の時間を確保し、参加者全員と指導者が稽古し、剣を交える

ことができるようにした。

## 2) 剣道交流から学んだこと

今回の講習会は真摯な態度で剣道に向き合うイギリスの若い剣士らが、自ら学びの場として講習会を企画し、非常に献身的に対応していた。その姿勢が筆者にとって大きな学びとなった。と同時に、剣道を指導する者として襟を正し、さらに真剣に剣道を学ばなければ、人に教えるなどということは到底できないと、師弟同行のあり方を再確認した。筆者は、2017年の新春に椎間板ヘルニアを患い、夏には50肩が始まり、剣道具すら満足に着けられない状態に陥っていた。加齢とはいえ、自身の体調管理の不出来が情けなく、猛省するばかりであった。

そしてこの講習会には、なんと筆者が金沢大学の学生時代にシェフィールド大学へ1年間留学していた当時、現地でお世話になっていた剣道クラブの仲間（キースとギャリー）が参加してくれた。実に25年ぶりの再会であった。彼らは、イングランドのハワースから5時間半かけて車を運転し、剣道具を持って講習会に参加してくれた。キースは、筆者のイギリス学生時代の写真を持って、またギャリーは剣道七段を取得し、イギリス剣道連盟部長として指導的立場で活躍していた。こうして剣道が繋ぐ縁を感じながら、改めて剣道の良さ、剣道を続けることの意義を確信することができた。



ギャリーとキースの間の筆者

## 5. おわりに

2018年3月に多くの方々に支えられて、在外研究から無事帰国した。2017年度のドイツ・ダルムシュタットでの在外研究は瞬く間に過ぎ去っていた。この在外研究は、筆者にとって何ものにも代えがたい穏やかな時間であり、自己を見つめ探究し、静かにじっくりと思考することの大切さを改めて学ぶ機会となった。ドイツでも人生の師といえる尊敬する研究者に出会うことができ、さらに、剣道を通して欧州各地で交剣知愛を体験することもできた。

今回、在外研究という貴重な機会をいただいた東海学園大学の関係各位の皆様へ心から感謝し、今後も教育・研究を通してさらに筆者自身が成長して、教育活動の中でこの研修成果をより多くの学生に還元できるよう努めていきたい。



教育系学生とヘッセン・メンバーの剣道交流

附記：本報告は、東海体育学会会報No.91に掲載された「在外研究報告：ドイツ・ダルムシュット工科大学での在外研究」および日本体育学会体育哲学専門領域会報Vol.21（4）の「学会報告：SHDドイツ・スポーツ科学会議」に加筆と修正を加え編集した内容である。

## <文献>

小田佳子 編著 (2017) 『イギリス女子剣道講習会 報告書』 pp.27-29

小田佳子・村松常司・恵土孝吉 (2018) ヨーロッパ剣道の普及状況—第28回欧州剣道選手権大会を通して—,

東海学園大学教育研究紀要 第2巻第2号, pp.77-84

小田佳子 (2018) SHD ドイツ・スポーツ科学会議 学会報告, 日本体育学会体育哲学専門領域会報, 2018. Vol.21 (4), pp.5-7

小田佳子 (2018) 在外研究報告: ドイツ・ダルムシュット工科大学での在外研究, 東海体育学会会報 No.91, pp.19-22

ベッテ・シマンク著、木村真知子訳 (2001) 『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点—』不味堂出版

Karl-Heinrich Bette/Uwe Shimank (2006) 『Die Dopingfalle-Soziologische Betrachtungen-』 transcript-Verlag